

日本産婦人科・新生児血液学会誌の

発刊を、心から喜びながら

弘前大学名誉教授

青森県立中央病院長 品川 信良

「産婦人科・新生児血液研究会」が、この度、関係者一同の念願がかなって、「産婦人科・新生児血液学会」に発展し、更にこうして、その機関誌を発刊することになった。心からお祝い申しあげるとともに、今回の「学会設立」に格段のご尽力をされた、相馬名誉教授、寺尾教授、真木教授のお三方を始めとする、関係各位に対し、心から感謝の念をささげる次第である。

そこで、この機会に、昭和51年（1976年）、本会の前身である「産婦人科（新生児）血液研究会」が誕生するに至った経緯などを簡単に振り返ってみる。

産婦人科領域の血液学は、永い間、産褥期や手術後の下肢静脈血栓症と新生児メレーナぐらいに、話題は限られていた。

それが第二次大戦中に、妊婦の栄養に対する関心が深まるとともに、妊婦貧血への関心も高まり、更に第二次大戦後は、母児間の血液型不適合や、胎児・新生児の溶血性疾患の問題にも、人々の関心は広がっていった。

更に、1950年代に入ってから、妊産婦の出血のうちのかなりのものが、いわゆる器質的な病変だけのためでなく、血液そのものの凝固障害によって起きていることが明らかになり、産科におけるdefibrinationや血管内血液凝固（症候群）は、産科以外からも注目されるようになった。

そして、1970年代に入るに及び、「血管内血液凝固（症候群）」はDICとして、それこそ医学以外の分野にまでも、人々に唼灸（かいしゃ）するようになり、一般の人々までが、最近では「主人は癌の再発で亡くなりましたが、直接の死因はDICでした」などと、日常の会話を交すようにもなった。

このように、産婦人科領域の血液学が、その診療や研究の範囲を拡げ、かつ深めていった結果、当然生まれるべくして生まれたのが、「産婦人科（新生児）血液研究会」であった。ときに1976年。

この研究会は、その後回を重ね、去年は第15回を迎えたが、ここにして期せずして、関係者一同の間に出てきたのが、「この辺で何か記念事業をやろう」という声と、「そろそろ学会に昇格してはどうか」という声であった。

前者に答えて誕生したのが、「産婦人科血液ハンドブック」（医学図書出版株式会社）の出版であるが、この出版に次いで、この度は、この機関誌が装いも新たに誕生したことを、私は心から嬉しく思っている。

「癌」や「周生期」や「生殖医学」などに較べるならば、今後も「血液」は、医学界においては、「少数派」であるかも知れない。しかし「血液」は、そのいずれとも、もう一段深いところで、深くかかわっている不可欠の研究分野であるばかりでなく、今なお時には、妊産婦などの死に直結もしている。まことに重大な研究分野である。

ついては、この「日本産婦人科・新生児血液学会」と「その機関誌」が、同好同学の士によって、今後着実に発展し、人類の福祉に益々貢献されることを、祈念してやまない。

（1991年 5月4日 朝 記す）

日本産婦人科・新生児血液学会の 設立を祝して

東京医科大学名誉教授 相馬 廣明

産婦人科領域では出血を伴う疾患が多く、ことに産科出血例では、コントロールのつかない大出血を招来することがある。産婦人科専門医なら誰もそのような出血性ショック例を経験していると思う。しかも婦人にのみ特有の月経にまつわる出血異常など、ただ内分泌異常で片付けられない凝固・線溶機序がこれにかかわることは、誰もかが認識している筈である。また新生児にみられる頭蓋内出血、メレナなど、これまた血液凝固機序がこれにかかわることは古くから知られている。このように産婦人科、新生児の専門医は、血液の形態学だけでなく、凝固や線溶のメカニズムをよく理解しなければならないし、それによって先天性血液凝固因子欠損症や、出血を伴わない血栓症の併発にも対応しなければならなくなった。このように重要な学問であるにもかかわらず、産婦人科や新生児の学会では、血液学を志向する研究者も少なく、従って演題数も少なかった。その少ない研究者が集まり、産婦人科・新生児領域での血液学研究の進展を願って発足したのが、昭和51年に行われた第1回産婦人科血液研究会であり、エーザイ(株)の協賛を得て東京エーザイホールで開かれた。それ以来毎年1回定期的に各地で研究会がもたれ、演題数もその数を増してきた。さらに新生児血液を研究する小児科医の参加も得て、この研究会の名称は、産婦人科・新生児血液研究会と改称された。同時に医学図書出版の鈴木社長の尽力により、毎年定期的に産婦人科・新生児血液誌が発刊され、研究会の記録や研究論文が報告されてきた。この度研究会の理事会の発案により、さらに本研究会が一步前進して、学会として改組され、飛躍することになった。想い起せば、1976年発足より15年目にして、日本産婦人科・新生児血液学会となり、それと同時にこの間大きく進展した血液学部門の研究により、ことに血液凝固や線溶を主体とした生殖や妊娠、分娩、新生児、悪性腫瘍などの生理的病理的機構が明らかになりつつある。そして、秋田大の真木教授一門や、浜松医大の寺尾教授一派、あるいは東京女子医大の中林教授や、北大医療短大の鈴木教授など、極めてユニークな世界に通ずる研究業績がこれまでの研究会から生まれて来ている。今後は益々、産婦人科や新生児血液部門での同好の若い研究者たちが、本学会より輩出し、日本でのこの研究分野の進展に貢献して貰いたい。同時に出血性ショックなどで死亡する婦人患者や新生児を一人でも多く救命出来るように、臨床的な経験の泉を本学会から吸収出来るようにして貰いたい。

以上、本学会の設立を祝するとともに、本学会会員数が益々増加されんことを切に祈るものである。

学会発足に当たって

秋田大学産婦人科学教授 真木 正博

いろいろと紆余曲折はあったが、第15回の産婦人科新生児血液研究会を最後に、本年から学会として発足することになった。

まず、第一に本学会の設立のために、ご苦勞をいただいた第一回会長の寺尾俊彦先生ならびに浜松医科大学産婦人科の諸先生に、また、研究会時代に基礎づくりをしていただいた品川信良先生および相馬広明先生に心から感謝の意を表します。

現在、国の内外を問わず、血液学会や血栓止血学会などの専門学会において、産婦人科や新生児の血液に関するセッションが必ず設けられているほど、産婦人科・新生児血液は重視されている。この領域には産婦人科や小児科を専攻しているものでなければなし得ないもの、また他科では全く思いつけないような沢山の重要問題もある。産婦人科・新生児領域の血液異常には、他科に依頼しても無理で、産婦人科医や小児科医自身が自分のものとして身につけておかなければならないものも少なくはない。

要は、単に基礎血液学や内科的血液学を産婦人科や新生児領域に導入さえすればすむということではなく、それが臨床の場で実を結び、生かされるようになることを祈ってやまない。成功を手に入れるのには、まずスタートすること、次に続けることである。本学会の発展と成功を祈って、筆をおく。

学会発足に当たって

聖マリアンナ医大小児科教授 山田 兼雄

昨年第15回産婦人科新生児血液研究会の会長を勤めさせていただき、横浜の地の利を得て、比較的会員の皆様からお世辞をいただき、大過なく責を果たさせていただいた。しかし、やはり実り多き会であったことは一辺に会員の熱心な御発表、御討論の賜物と思うが、この昨年度の総会はまさに大変重要な会である結果となった。それは幹事会で研究会から学会に移行する歴史的な方針の決定の時期に会長をさせていただいたことである。

さて本学会に望むことは、

- 1) 産婦人科と小児科が完全に融合したという点でわが国でも最も特徴のある学会であること、しかしお互いに簡単に妥協はしないことが望ましい。
- 2) 終局の目的は、女性・妊産婦ならびに新生児のwelfareである。研究熱心のあまり新生児から採血することが頻回、多量になることは好ましいことではない。出来るだけ検体は融通し合い、データを利用し合っ
て血液を節約しながら新生児の研究をおこなってほしい。採血に際しては、必ずinformed consentがなければならない。
- 3) 血液の面より、女性・妊婦・胎盤・新生児・乳幼児との面で一連のつながりのある学問が研究される貴重な場面であることを望みます。

学会の設立と学会誌の発刊に当たって

浜松医科大学産婦人科教授 寺尾 俊彦

従来の産婦人科・新生児血液研究会があらたに学会として出発することになり、それに伴って学会誌が刊行されることになりました。

学会設立の趣意書には以下の通り書かれています。

『昭和五十一年第一回産婦人科血液研究会が設立され、更に昭和五十六年第六回からは小児科に関連する分野も含めて産婦人科・新生児血液研究会が設立されました。それ以来、毎年一回の学術集会が開催され、平成二年六月には第十五回学術集会が開催されました。研究会誌は昭和五十二年の初刊から、現在までに継続発刊され第十四巻一号までがすでに発刊されています。』

近年の血液学の進歩は著しく、血液学が単に血液にとどまらず、あらゆる医学の分野に深く関連することが次々と明らかにされています。それに伴い研究者の数も学会発表の数も著しく増加しています。産婦人科や新生児領域の血液学においても例外ではありません。血液学の進歩はその裾野を広げただけか、一方では細分化し、より高度な専門知識を必要とする時代となりました。このような時、会員相互が情報を交換し、学術の進歩に貢献できるような場が要求されています。これに対応するために従来の産婦人科・新生児血液研究会を発展的に解消して新たに学会として出発しようとするものです。』

このように現在世界で最も多くのMDやPhDが研究に従事し、近年著しい進歩を遂げている分野が血液学であります。血液に関する研究が単に循環している血液だけにとどまらず、血管内皮細胞は勿論のこと全身の臓器や組織との相互関連が次第に明らかにされる一方で、血栓、止血、血液凝固、循環、造血、免疫、炎症、組織の修復、受精、着床、発育そして癌の増殖と浸潤等々血液に関連するあらゆる分野において、その生理的機構、病態、治癒機転、治療法に関する研究が行われています。さらにその研究は細胞レベル、分子レベル、遺伝子レベルに及んでいます。このように血液に関する研究は、その深さを増す一方でその裾野を拡げています。

産婦人科新生児の領域では、妊娠、分娩、産褥や女性であること、胎児、新生児であることが血液の生理や病理に修飾を加えます。従って、私たち産婦人科医や小児科医がこの研究の当事者にならねばなりません。ここに学会設立の気運が生まれたものと思います。この領域の研究を一層発展させるための土壌となるのがこの学会であり、花を咲かせるのがこの学会誌かと存じます。ここに会員各位のご協力を切にお願い申し上げます。

目 次

線溶系研究の最近の進歩 —プラスミノゲンアクチベーターインヒビター1と2を中心として—	高田 明和 他	11
子宮内膜再生の機構—血小板由来成長因子の関与について—	根上 晃 他	14
胚由来血小板活性化因子(EDPAF)と着床	杉並 洋 他	16
フィブリンに対する細胞接着機序と 培養子宮内膜間質細胞の線溶による増殖制御	上山 護 他	18
妊娠の維持における接着性物質の役割に関する研究	小林 隆夫 他	20
胎児発育における免疫系の発達	斎藤 滋 他	22
未熟児新生児の血小板機能に関する研究	飯岡 秀晃 他	24
未熟児・新生児における凝固線溶動態の検討	福田 雅文 他	26
新生児(正常熟産児及び低出生体重児)のPAI-1	榊井 志保 他	28
SGA 超未熟児の肺出血と凝固・線溶異常について	後藤 敦子 他	30
低出生体重児における一次性出血の危険予知に関する検討	山本 初実 他	32
極小および超未熟児の血液凝固・線溶系に関する検討 —特にSGA児の出血症の防止と治療の試み—	後藤 薫 他	34
未熟児貧血に対するrEPOの臨床効果	中村 友彦 他	36

輸血・GVHD	白川 嘉継 他	38
ECMOの新生児呼吸循環系並びに血液凝固系に及ぼす影響	茨 聡 他	40
分娩時 CRP 高値の母体から出生した未熟児にみられる 白血球増多の持続について	水野 誠司 他	42
未熟児に対する recombinant human erythropoietin (rHuEPO) 投与の試み	竹田 豊彦 他	44
未熟児貧血に対するr-HuEpo 皮下注射法の検討	沢田 健 他	46
未熟児の早期貧血に対する臨床的検討	池田志麻子 他	48
未熟児における好酸球増多症の検討－呼吸器疾患との関連について－	山本 千尋 他	50
TAT, PIC, D-dimer の変動よりとらえた妊娠時における凝固線溶状態	島田 逸人 他	52
PP19-ELISA の開発及び臨床応用	鈴木 良知 他	54
妊娠経過に伴う母体・胎児の Protein S 動態	奥 正孝 他	56
妊娠中の凝固線溶能の変動について	戸崎 守 他	58
重症妊娠中毒症妊婦および臍帯血における線溶系 (特に active PAI-1) の変動について	大塚 博光 他	60
正常妊娠および妊娠中毒症における血清PAF acetylhydrolase	松原 圭一 他	62
母体の凝固線溶系と胎児発育の関連	浜崎 哲史 他	64

分娩後に痙攣発作をきたしTTP (thrombotic thrombocytopenic purpura) が 疑われた症例	伊原 由幸 他	66
切迫流産で敗血症とDICを発症した子宮筋腫合併妊娠の1例について	荻原 哲夫 他	68
当科における血栓症症例の検討	吉永 明里 他	70
弁置換後の妊娠分娩管理	生田 雅昭 他	72
第XIII因子低下症の患者にみられた大量性器出血の一例	堤坂 敏昭 他	74
卵胞破裂機構における Plasmin generating system の意義	生方 良延 他	76
着床機構における線溶系とPAF の意義	三室 茂子 他	78
子宮内膜の周期性変化とXIII A 産生組織マクロファージの動態に関する研究	朝比奈俊彦 他	80
壊死性腸炎 (NEC) に対する第XIII因子製剤投与の効果について	平野 隆博 他	82
新生児期に発症したKasabach-Merritt 症候群7例の治療経験	堀越 泰雄 他	84
乳児ビタミンK (VK) 欠乏症に対するVK予防投与方法の検討	富田 幸治 他	86
ITP 合併妊娠における臍帯穿刺施行例	吉村秀一郎 他	88
Flow cytometry を用いて測定した臍帯血血小板膜 glycoprotein 量	安井 昌博 他	90
抗Yuk ^a (HPA - 4b) 抗体による新生児同種免疫性血小板減少性紫斑病の一例	野口まゆみ 他	92
超大量免疫グロブリンの投与を試みた新生児 passive immune thrombocytopenia の治療経験	小林 道弘 他	94

反復死産患者におけるLupus anticoagulant に対するIgG 投与効果(第1報).....	小川 博和 他	96
反復流産患者における抗 Calphobindin-I抗体の存在及びその意義について.....	小笠原真弓 他	98
プレドニン, アスピリン療法を行いパルスドプラーで管理し生児を得た Lupus anticoagulant 陽性不育症.....	岡垣 篤彦 他	100
切迫流産に対して塩酸リトドリンの点滴静注が有効であった習慣流産の2症例.....	石川 雅嗣 他	102
Rh式血液型不適合による新生児溶血性疾患の9例.....	亀山 順治 他	104
既感作Rh(D)不適合妊娠管理における Phagocytosis Assay の試み.....	安達公美子 他	106
輸血歴のある妊婦における血液型不適合妊娠.....	浮田 昌彦 他	108
4回の妊娠中に1度も母児免疫反応がおこらなかった、 きわめて稀な血液型(-D-/-D-)妊婦の1症例.....	阪西 通夫 他	110
抗Lewis式血液型抗体によって間接クームス反応が陽性を示した Rh陰性妊娠の2例.....	市古 哲 他	112
主要産科施設における抗D抗体以外の赤血球抗体による新生児溶血性疾患.....	浮田 昌彦	114
経臍帯血管輸血の有用性.....	川鱒 市郎 他	116
胎児母体間輸血症候群の2症例.....	中堀 隆 他	118
弘前大学における最近15年間の輸血の実態と適正化.....	中村 幸夫 他	120
自己血輸血による循環系、免疫系の検討.....	福田 功 他	122

静岡県における妊婦 HTLV - I 抗体スクリーニング成績	前田 真 他	124
Polymerase Chain Reaction(PCR 法) を用いた HTLV - I 垂直感染についての検討	谷川 拓男 他	126
HTLV-Iキャリア末梢血中HTLV-I感染細胞定量系の確立と 感染要因に対する考察	安藤 良弥 他	128
培養 ATL 細胞のクローンの変化とHTLV - I 関連抗原の発現について	岩月 啓氏 他	130
妊娠時における血液と胎盤組織中の過酸化脂質、 フリーラジカルに及ぼす $2-OHE_1$ の影響について	吉岡 保 他	132
妊娠時におけるビタミンE の役割 －血小板凝集阻止活性を中心に－	赤田 忍 他	134
卵巣過剰刺激症候群 (OHSS) におけるキニンーカリクレイン系の 関与について	武田 志保 他	136
母体および胎児循環におけるナトリウム利尿ペプチド (ANP, BNP) の 濃度について	伊東 宏晃 他	138
妊婦におけるヘマトクリット値の変化の臨床的意義に関する検討	近藤 裕司 他	140
妊娠中の浸透圧変化に関する研究	小国 信嗣 他	142
抗癌剤療法施行後に2次白血病を併発した子宮肉腫の1例	北村 文明 他	144
子宮癌における Plasminogen activator の組織内局在の意義	野崎 宗信 他	146
顆粒球エラスターゼによる腫瘍産生プロウロキナーゼの不活化	金山 尚裕 他	148